

第44回

わたしからの
人権メッセージ

2023 年度 特選作品集
堺市人権教育推進協議会

第44回

わたしからの人権メッセージ

特選作品集

「わたしからの人権メッセージ」発刊にあたって

堺市人権教育推進協議会では、人権を守り、平和で差別のない明るい都市をめざして、市民主体の活動を進めています。その活動の一つが、本年度で第四十四回を迎える「わたしからの人権メッセージ」です。多くの市民の皆様が日常生活の中の人権問題に関心を持ち、自ら考え綴ることによって人権についての認識と理解を深め、さらに作品の共有を通して広く人権啓発につなげることを目的として実施しております。

今年度も、私たちの呼びかけに幅広い年齢層の皆様から、数多くのメッセージを寄せていただきました。作品を応募していただきました皆様からお礼を申し上げます。厳正なる審査の結果、優秀な作品二十点を特選作品とし、ここに、「わたしからの人権メッセージ」特選作品集として本冊子を発刊します。

人権が尊重され、安心して暮らすことのできる平和で差別のない社会を実現することは私たちにとって共通の願いです。しかしながら、現在においても、部落差別、女性などに対する差別や偏見、また虐待など、心を痛める事象が起こつています。世界では多くの人々の尊い命が戦争や民族紛争等により失われています。また、感染症に対する偏見やインターネット上の悪質な

差別・誹謗中傷が発生するなど、人権問題は複雑化・多様化しています。

そのような中、堺市では、「堺市平和と人権を尊重するまちづくり条例」を施行し、すべての人の人権が尊重され、安心して暮らすことのできる都市の推進に取り組んでいます。

また、「堺市SDGs（エスディージーズ）未来都市計画」及び「堺市基本計画二〇二五」を策定し、平和と人権を重視した市政を展開することで、誰一人取り残さない平和と人権が尊重される社会の実現をめざしています。

すべての人が、さまざまな人権問題を自分自身の課題として受けとめ、日々の生活の中で積極的な行動へと発展させていくことが大切です。

本冊子が、一人でも多くの方々に愛読され、私たちの身近にある人権問題を考えるひとつのきっかけとなり、わたしたちのまち堺から、人権文化の花を咲かせる一助になることを期待しています。

二〇二三年十二月

堺市人権教育推進協議会

会長 金丸尚弘

もくじ

□ ぼくのおにいちゃん	1
□ 命のバトン	3
□ 地球温暖化と未来	5
□ 障がい者の人権	7
□ 僕のチーム	9
□ もちあじ	11
□ 戦争と生きる権利	13
□ いじめ	15
□ 平等な社会へ	17
□ 「躰」という名の仮面	19

[illegible]

※御本人の許諾の得られたものを掲載しております。

ぼくのおにいちゃん

小学校二年

寺田

倫

ぼくのおにいちゃんはしゃべれません。じへいしようというしうがいらしいです。ぼくは、ママに、しゃべれないだけなのになんで字もかけないの？ときいたら、「からだは4年生だけど、あたまは2さいなんだよ。」といいました。

ぼくは、このさく文をかくことにすぐゆうきがいました。ともだちに、「おにいちゃんしゃべれないねん。」といったら、「しゃべれないん、ダッサ。」といっていました。そのことばで、ぼくはきずきました。それから、やさしいともだちの4にんにしかいわなくなりました。

ぼくにはうまれたころから、じへいしうのおにいちゃんがそばにいました。おにいちゃんのできないことやむずかしいことは、ぼくがてつだっているよ。そんなおにいちゃんをバカにしたらムカツとするのは、かぞくだったらみんなもそうおもうよね。しうがいがあつてもなくても、こころはみんないっしょだよ。かなしい、くやしきもちはだれにだつてある。バカにされたり、のけものにされてもいい人は、このせかいにだれ一人もないよね。

このさく文によって、しょうがいしやの人に、もしやさしくできていない人がやさしくなってくれると、ぼくはこのさく文をかいたいみがある。せかいで人と人がたすけあうようになつたら、ぼくはうれしい。



命のバトン

小学校三年

岡 おか

愛 あい
莉 り

夏休みに、長崎のおばあちゃんの家で、一緒に千羽づるをおりました。そのときに、七十八年前の話を教えてもらいました。

七十八年前の八月九日、私のひいおばあちゃんは、長崎の香焼（こうやぎ）という島に住んでいたそうです。この日、用事があつて、船で長崎の本土に行く予定でした。ところが、のる予定の船にのりおくらせてしまいました。あついで、次の船を待つていると、海の向こうがピカッと光ったそうです。十一時二分に長崎に落とされた原子爆弾でした。その爆弾で、約七万四千人の人が亡くなったそうです。ひいおばあちゃんも、予定通りの船におくれずにのつていたら、命をうばわれていたかもしれないそうです。そして、その三年後におばあちゃんが生まれ、母、私へと命のバトンがうけつがれて、今の私がいます。

バレエを踊ったり、学校で算数のべん強をしたり、伝記の本を読んだり、妹とけんかをしたり、あくびをしたり：今、私が当たり前にしていることは、実は当たり前ではないのだと思いました。なぜかという、七十八年前のあの日に、命のバトンがとぎれていたら、私は今ここにいないからです。だから、私は、自分の命をもっと大切

にしていきたいです。

それと同じように、世界中の一人一人の命も、もっと大切にしなければいけないと思います。なぜなら、世界中の一人一人が、命のバトンをうけついできた、大切なそんざいだと思うからです。

今も、世界中で、戦争がたくさんおこっています。核兵器は、世界中で、一万発以上もじゅんびされていると新聞で読みました。

「戦争がなくなつて、世界が平和になりますように。」

でき上がった千羽づるを、おばあちゃんと一緒に原爆落下中心地に持って行き、手を合わせて、心の中でいのりました。

地球温暖化と未来

小学校五年

河合 柊 果

みなさんは地球の未来について考えたことはあるだろうか。最近、猛れつな暑さが続いている。外出する気をさまたげるような暑さだ。こんな猛暑が続けばいつか人間がほろびてしまいそうで仕方がない。

こんな信じられない暑さは、地球温暖化によるものだ。この地球温暖化は温室効果ガスの排出により、太陽の熱が地球にとじこもってしまうことが原因である。この温室効果ガスには様々な種類があり、特に「二酸化炭素」というガスが多く割合を占めている。そして、二酸化炭素は私たちにとって身近なものから排出されることが多い。だから温室効果ガスの排出をなくすことは困難だ。だが、減らすことはできるのではないか、私はそう考えている。

実際に温室効果ガスを減らすには、どのようなことをすればいいだろう。温室効果ガスが排出される身近なものは、照明、家電製品、自動車、エアコンなど。このような家庭から出る温室効果ガスは、私たちの努力次第で減らせられると思うのだ。具体的な内容は、外出するとき使わない部屋の電気は消す、近くの店はわざわざ車で行かずに歩いたり自転車で行く、テレビはつけっぱなしにしない、エアコンに頼りすぎない、

冷蔵庫はむだに開け閉めしないなど。また、ごみをもやす量を減らすことでも温室効果ガスを減らすことができる。ごみをもやすことで二酸化炭素が排出されるため、もやすごみを減らせば温室効果ガスも減らせる。「ごみを減らす」とは、「ごみを捨てない」ということではない。「ごみをもやす量を減らす」ことが大切である。捨てる物を制限することは、とてもむずかしくてがまんが必要と思うかもしれない。けれど分別してリサイクルをすることで、ごみのもやす量を減らすことはできる。ぐつと気持ちが軽くなるのではないか。私もこの事実を知ったことで楽になり、リサイクルに取り組みやすくなった。

こういった知識を身につけることが大切だと思う。私は、このメッセージで少しでも多くの人に地球の未来について考えるきっかけになれば何よりだ。たくさんの方がほんのささいなことを意識していけば少しでもいい未来になるのではないか。

障がい者の人権

小学校六年

杉 すぎ
山 やま

昂 あきこ

ぼくのお母さんは、障害者です。右目が失明して見えません。3歳の時自宅でケガをしたそうです。病院へ行き手術をしたけど眼はなおらなかったそうですが、もしかしたら両眼が見えなくなっていたかもしれないと言われたそうです。

小学校、中学校で片目というだけでいじめにあっていたそうですが、毎日休まずに登校したと聞いてびっくりしました。ぼくだったら休んだと。

ぼくが、お母さんの目がおかしいなあと思っていたがなかなか聞けず。ある時義眼がテーブルの上や、いろんな所に置いていたのがビックリ。お母さんの顔を見てまたビックリし気持ち悪いと言ってしまったが、お母さんは笑って、どうよーとほつぺをすりすりしてきました。同じ場所に置くようにと言ってもなかなか聞いてくれないので、ぼくが直すようにしています。義眼って目と同じに作られているが、ただ見えるわけではないけど見えそうに見えるのが不思議。

時々義眼をはずしたまま出かけることがある。目がないだけで気持ち悪そうな顔をする人がいる。でもお母さんはぜんぜん平気な顔をして歩いている。目に見えている障害はわかるが、目に見えない心の障害などで苦しんでいる人もいることも大事。

最近バスに乗った。白杖を持った人が乗ってきたが、乗れずにこまっていると、お母さんが声かけ誘導してました。ぼくは何で手伝ったりするのと聞いたら、「こまっている人がいたら手伝ってあげる。でも手伝う時目の見えない人はさわられるとびっくりするから声をかけながらしてあげると安心するの。もしお母さんが両目が見えなくなったら助けてくれたらうれしいなあと思って、片目であっても出来ることはいっぱいあるよ。」と教えてもらったので何が出来るかわからないが、ぼくは困っている人がいたら手をさしのべたいです。



僕のチーム

小学校六年

加藤 克基

「人権」とは何か、よくわからなかったので、まずこの言葉を調べた。「人権」とは、「人が人として、社会の中で、自由に考え、自由に行動し、幸福に暮らせる権利。すべての人が、生まれながらにもっている権利」とあった。これを知って、所属する野球チームのことを考えた。

僕が所属する野球チームは、来年で創部五十周年を迎える。チームの最盛期には、部員が70〜80人いた。けれど、罵声や怒声などの厳しい指導で、部員が7人になってしまった。罵声や怒声を何度も何度も浴びせられたら嫌だと僕だっと思う。野球が楽しくなくなつて、「来週も野球に行きたい。」とは思わなくなつてしまう。でも、僕が入部した頃には、指導法を大きく変えようとしていたところで、僕は楽しく野球ができていた。子どもの心（人権）を考えて指導してくれているから、のびのびと楽しい野球ができていた。「来週も野球をやりにいきたい。」と思えている。

監督やコーチの言葉だけではない。チームメイトの言葉で傷つくことだってある。試合のチャンスで打てなかった時、エラーした時、悔しい気持ちは自分が一番よくわかっていて。それをチームメイトに指摘され、かわいそうに思うことがある。だから、

そういう場面で相手にかける言葉を気をつけていきたいと思っている。次につながるように、自分がかけられたら嬉しい言葉を相手に伝える、そう考えて言葉にしている。

僕の野球チームのことを考えていると、子どもの人権を守ること、**「言葉」**が大きく関わっていると感じる。大人も子どもも、伝える相手のことを考えて言葉にすることが、みんなの人権を守ることになるように思う。



もちあじ

中学校一年　　上野生琉
うえの　な　る

私は同和問題について書きます。

以前、部落差別の話聞いたことがあります。その話の中で、部落出身だからといって差別され、結婚を許してもらえなかったり、部落出身だからといって職場でも差別されたり、仕事を辞めさせられたり、自分の住んでいる町の名前を隠さないといけない人もいました。その話を聞いて私は、部落出身だからといって結婚や仕事や、町の名前を隠す意味がはじめは分かりませんでした。なぜなら、部落出身の人は何もしないからです。何もしていないのに、差別をされて、それが広がっていくのです。

そして、この同和問題の中で私が一番理解できないのは身元調査です。なぜなら、全く関わったこともない他人が勝手に自分のことを調べることを疑問に思うからです。他人から自分のことを調べられることは、同時に、他人に自分の価値を決められている気がします。それもあつてはならないことだと思いました。

こういう同和問題を少しでも無くしていくためには、今まで私が学んできたことを忘れずいろいろな物事に目を向けることが大切だと思いました。他にも、自分だけでなく、周りの人と協力しながら支えあうことも大切だと思います。そして今まで学ん

だことを、これからの世代のために、自分たちから伝えていくことも大切なのかなと思いました。

でも、同和問題だけが解決しても、ほかの人権問題は解決しません。その解決のためには、私が小学校で学んだ「人それぞれのもちあじ」・「決めつけない」ということも大切で、それらを伝えていかなければいけないと思います。「人それぞれのもちあじ」とは、人それぞれの個性を認め合うことです。「決めつけない」とは、外見で人を決めつけないという意味です。その二つのことも忘れず想い続けることで、完全には無理かもしれないけれど、少しずつ差別は減っていくのかなと思います。そして、性別・国籍・年齢関係なく、世界中の人たちが笑顔で楽しく暮らしていける社会になっていくことを信じています。

戦争と生きる権利

中学校一年

伊 豫 田 莉 央
い よ だ り お

太平洋戦争の末期に結成された、特攻隊。爆弾を積んだ戦闘機で敵の船に体当たりし、沈没させる。そんな中で、九回出撃し、九回生きて帰ってきた、佐々木友次さんを私は知った。

もともと私は小説などで少し特攻隊のことを知っていた。ほとんどが生きて帰ってこないことも知っていた。だから佐々木さんが九回生きて帰ってきたと知った時、私は家族のこのようなほつとした。同時に、「よかったな」という思いもこみ上げてきた。

だが、まわりの反応は全く違ったものだった。「お国のために死ぬ」ことが当たり前だったこの時代、佐々木さんは生還するたびに上官に「次は必ず死んでこい。」と怒鳴られていた。これを知り私は、本当におかしいと思った。生きるために生まれてきたのに自分から死に行くなんて、本当につらいだろうと思った。戦争のせいで本当にやりたかった事をできずに人生が終わってしまうことを考えると、本当にむなしくなった。

だが、佐々木さんはそんな状態でも生きることを考えていた。その時代にはそぐわ

ない考え方だったのかもしれない。でも、人が誰かに「死になさい」と言われて従うなんてことは、絶対にあつてはいけない。人には、自由に生きる権利がある。私は、佐々木さんの行動は立派だと思った。

戦争は、人から「生きる権利」を奪っていく。佐々木さんは生き延びることができたが、あるはずだった未来を奪われていった人もたくさんいた。だが、終戦から七十八年経ち、戦争を実際に経験した人も、少なくなってきた。佐々木さんも、二〇一六年に亡くなった。このような事があつたという事実が忘れ去られないように、そしてこれから二度と「生きる権利」が奪われないように、私は戦争のことを知り、伝えていきたいと思う。

いじめ

中学校一年

村^{むら}本^{もと}日^ひ向^{ゆう}^が

ある日の学校の休み時間に、ろう下から「だつき。」と声が聞こえました。そこには、男女のグループがいました。一見楽しそうなふんい気でした。でも、よく見るとそのグループの一人をバカにしている様子でした。バカにされている生徒は、苦笑いしてました。ぼくはどうすればいいのか分かりませんでした。いじめの現場を見るのは初めてでした。

家に帰って、その日見た事がモヤモヤして嫌だったので、色々考えてみました。

小学生の時、私が授業中ミスをしてしまった時、クラスメイトが三、四人で私がミスしたことをバカにしてくきました。周りの人達には、ノリで感覚で笑っているように見えたと思います。私も自分の事なのに一緒に笑ってしまいました。悲しいのに笑ってしまっている自分自身にすごくショックでした。今でも覚えています。バカにされた本人も一緒に笑ってしまうと、周りの人達に自分自身の悲しい気持ちが伝わらないので、こういう時はどうすればいいか考えてみました。

強い人が弱い人をいじめたり、多い人数で一人をいじめたりすることは、もちろんいじめている方が悪いですが、今回の件は、自分の傷ついている気持ちを相手に伝え

ないから自分も傷ついているのだと思います。そこで私の考えるいじめを減らす方法が二つあります。

一つ目は、自分がやられると嫌なことは相手にしないということです。何かする時は、相手の気持ちをよく考えるべきだと思います。ネットなど相手の顔が見えない場合も同じです。特にネットでは、書き込みや、動画などは、一生残るので、もつと考えなければいけないと思います。

二つ目は、自分が嫌と思う時は、嫌とはつきり言う事です。そうすることにより仲間外れにされるかもしれません。でも、自分の気持ちが伝わり嫌な行為がなくなったり今より仲が深まるかもしれません。これを一人一人が意識すればいじめが減っていくと思います。

いじめを完全になくすのは、難しいと思いますが、今自分自身にできる小さなことを、みんなが積み重ねていけば、いつかは世界に広がり、いじめがなくなる時が来ると信じています。

平等な社会へ

中学校二年

田 原 菜 夏
た はら な な

私は何年も前、衝撃的なニュースを見て、鳥肌が立った。今でも鮮明に覚えており、それはタリバンに鼻を切り落とされたアフガン女性の写真だった。女性はわずか十二歳のときにタリバン兵と結婚させられ、そこから逃れた罪として鼻を切り落とされたという内容だった。

今、こうしてジェンダー問題を考えると、アフガニスタンのこのニュースは、最近よく耳にする「ジェンダー」問題と繋がっている。これは氷山の一角で、世界に性差別が存在するということでもある。SDGs目標5にも「ジェンダー平等を実現しよう」と掲げられている。国際連合では、「女子差別撤廃条約」が締結されており、世界全体がルールとして設けるほど、女性差別は深刻な課題であることが分かる。

私の身近では男女格差が減ってきているかと思いつつも、ニュースや資料を見ると、まだまだ男女格差は残っていると感じる。例えば私の学校は校長先生が女性であるように、先生という世界では女性の人権が尊重されているなと思うけど、政治家という世界では、様々なデータによると、女性の国会議員の割合が世界で約百五十位という少ない結果で、やはりまだ日本の女性の人権が尊重されていないのではないかと考え

る。

このようなことを防ぐためにも、一人一人がこの世界の現状を把握し、男女平等についてしっかりと理解し正しい行動を取ることが一番大切ではないだろうか？

ふと、私は一番男女平等な国はどこかと気になり、調べてみると、十四回連続でアイスランドが一位だった。アイスランドも、もともとは男性優位の社会だったが、九割以上の女性が仕事や家事を放棄して、女性の存在の大きさを社会に示したのがきっかけであった。アイスランドの女性のように、誰かがしてくれるだろうと思って待つのではなく、自分で動くことが大切だと思う。そうして、権利に甘えず、女性もしっかりと勉強していくべきだ。

また、パキスタン出身のマラ・ユスフザイさんが十七歳でノーベル平和賞を獲得したときのスピーチから、今、私たちは素晴らしい教育を受けていること、たくさんの自由な時間があることを痛感した。

このような環境のもと、アイスランドの女性に学び、勉強して、自分自身で女性が活躍できるような状態にしていきたい。

「𡇗」という名の仮面

中学校二年

足立花音あだち かのん

小学校のころ、両親と出かけた先で、大声で子どもを叱る女性を見かけた。女性のあまりの剣幕に、子どもはおびえ、泣いていた。私は両親に「なぜ誰も止めないの。」と聞いたが、父も母も困った顔で「他人の家のことはわからないから勝手な判断はできないよ。」ということだけだった。

子どもの人権について考えようとする、真つ先にこの時のことが頭に浮かぶ。その時私は、これは虐待だとまで考えたわけではないが、誰かが助けるべきだと思ったからだ。だが私はどうすることもできず、とても悔しい思いが心に残った。

なぜ両親はあのととき何もしなかったのか、私が思うには、「親が子を叱るのは𡇗」との考え方が世間に根付いており、行われていることが𡇗という「教育」なのか、単なる「暴力」なのか判断できなかったのだろう。特に、殴る、たたく等の身体的暴力に比べ、「これをしないとあれはさせない」と言った脅しや「帰ってくるな」等の暴言、放置する等の無視は、よく見かける光景だが、即虐待とは、見られていない気がする。それは「𡇗」の名のもとに言葉の線引きがあいまいにされ、単なる暴言か、子を持つての注意なのか、親自身にも周囲にも区別しにくくなるからだと思う。

だが、叱ることと怒ることは違う。この気持ちを考えず傷つけるような言葉を故意に投げつけることは教育とは無縁の行為だ。

大阪府の『子どもを虐待から守る条例』に「子どもへのぎゃくたいは理由の如何にかかわらず、許されないことであり、子どもに対する著しい人権侵害であることを自覚しなければならぬ。」とあるように、ひどい叱責が、躰と判断がつかないことを理由に、見逃されるべきではない。

「子どものため」という仮面の下に行われる暴力から、本当に子どもを守るには、小さなことでも通報できる環境と、一人一人の判断力を育てていかなければならないと思う。

祖母の認知症

中学校二年

僕の家族には八十二才と八十九才の祖父母がいます。その祖母は僕が小学校低学年のときから、アルツハイマー型認知症にすでになり始めていました。しかし最初の方は特に目立った症状はありませんでした。

僕が小学校二年生の頃、あまり言ったことに従わなかったので、祖母が僕のおもちゃを片づけました。それは自分が悪く、そこまでは良かったのですが、次出すときに祖母がそのおもちゃを隠した場所を思い出せなくなりました。本人に聞いても分からないので、必死に探しました。結局、諦めていた約半年後に見つけることができましたが、あのときに認知症の始まりだと思っています。

このように、本当に初期の段階では時々物の場所を忘れるだけだったのですが、僕が高学年になると、車も乗れなくなるなど、症状が進行してしまいました。

その大きなきつかけが、圧迫骨折で病院に入院したことです。コロナがはやっていたので面会することもできず、退院まで数カ月かかったからです。

この夏休み中にも大きな出来事がありました。休み初日の午前八時半に祖母が、散歩に行ってくるよと言って出かけていきました。普段は近場の池のまわりを歩いて、

一時間以内で帰ってくるのですが、そのときは三時間経っても戻ってきませんでした。一回かなり遠くへ行っていたこともあるので母も僕もしばらく待つていましたが、帰ってくる気配はありませんでした。祖母が携帯電話を持っていていなかったのに連絡もとれませんでした。そこで警察に捜索願を出しました。母が探しに行き、一人で家にいるときは、見つかるかなと不安でいっぱいでした。しかし、三時十分頃に警察署から、見つかったとの報告がありました。後で母が祖母に事情を聞いても、全く道に迷ったという自覚はありませんでした。散歩に行つて普段通り帰ってきただけという感じでした。

認知症は、それまで他人事で具体的には知りませんでした。しかし、自分の家族になると見方が変わりました。また、色々な症状があり、物や自分の位置、時間、数分前の記憶が理解できないなどです。祖母は祖母なりに頑張っているのです、そこは認めて、優しくしてあげたいです。

認知症の人には、常に笑顔で接し、責めずに一緒に寄りそうことが大切です。相手に怒ったり、放つておくと逆に認知症が進行すると分かりました。最近よくテレビで高齢者虐待のニュースがよくあります。しかし、その人たちも、今まで他の人のために働いて尽くしてくれたと思うと、高齢者にも人権はあつて当然だと思います。祖母には、もつと感謝したいし、もつと長生きしてほしいです。

障害について知ること

中学校二年

新^{にい}留^{どめ}華^か凛^{りん}

私の弟は発達障害です。弟の場合、注意欠如多動性障害といって、不注意（集中力がない）、多動性（じつとしていられない）衝動性（思いつくと行動してしまう）といった症状が見られます。

そのため、小さい頃から周りの人とトラブルになることがよくありました。そういった時に障害を理解していない人から心無い言葉を言われたりしました。

大きくなるにつれ落ちついてきて、トラブルになることも少なくなってきたのですが、半年程前、大きなトラブルがありました。それは、よく遊んでいた友達とけんかになった際、

「いつも先生が後ろにいてるやん。障害者やからって特別やと思うなよ。」
と言われ、

「好きで発達障害に生まれたわけじゃない。」

と泣いて帰ってきたことです。その姿を見て、私はとてもショックを受けました。

今まで弟の周りには、障害なんか関係ないと普通に接してくれていたり、困っていたら助けてくれたりする人が多く、障害についてそういう風に言ってくる人はいな

かったからです。

発達障害だからといって特別なわけではなく、個性だと私は思っています。だから、理解してくれない人がいるのは悲しいです。ただ、身近にそういった人がいないと理解することが難しいのも分かります。私も弟が発達障害と診断されて調べるまで何も知りませんでした。だからこそ知ることが重要だと思います。

弟とけんかした友達は、後日先生から発達障害について話を聞き、弟とも話し合っ
て仲直りをしました。今では、毎日一緒に登校するほど仲が良いです。弟を理解して
くれる人が増えて、弟がいつも笑顔で過ごせることがうれしいです。

このことから、困り事がかかえている人のことを完全に理解するのは難しいですが、
理解しようとするのが大切だと思います。

みんながみんなに優しくできる社会になればいいなと思います。

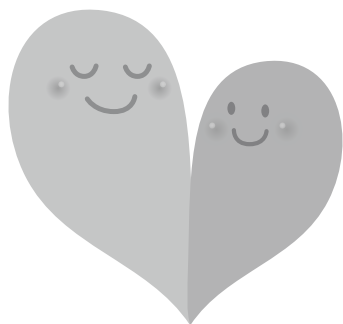
自分らしく

中学校三年

田^た仲^{なか}咲^さ来^く

私はある日「女なのに变だ」と言われ、違和感を感じました。自分がおかしいのかなと思つたと同時に、好きなものを好きと言っているだけなのにどうしてだろうと思いました。性別を理由に否定されたことが悲しかったです。性別と心が一致していかなくても、好きなものは好きだし、苦手なものは苦手で、それを性別によつて否定され、決めつけられるのはおかしいことだと思います。「女らしく」とか「男らしく」じゃなく、「自分らしく」であるべきだと思います。

生きている人の中には、色々な人がいます。全く同じ人はいません。人と違うというのは怖いことでもあります。それでも、自分に素直に嘘つかず、「自分らしく」で進んでいける人に私はなりたいです。性別に左右されるのは嫌です。私は女でも、男でもないです。私は私です。



話す勇氣と誹謗中傷

中学校三年

山^{やま}田^だ佳^か奈^な

私は、最近好きな歌い手さんが性別適合手術を受けていたことを知った。

その人は、性同一性障がいを持ってしていると勇氣を出してカミングアウトを視聴者にする自分が尊敬している人だ。その人が先日ユーチューブで性別適合手術をタイで受けたことを話していた。その報告動画のコメントは、「お疲れさま!」「話してくれてありがとう!」といった内容であふれていた。そんな中ひときわ目についたコメントが「こんなことネットに流さないでほしい。気持ち悪い。」という内容だった。どうしてこんなことが言えるんだろうか。どうして人の気持ちを考えられないのだろうかと思つた。やめてほしいなら見なければいい。その人が嫌いなら表示されないようにしたらいい。それなのにわざわざ本人が見えるところ、見るところでその言葉を伝えるのは相手を傷つけてしまうのではないのか考えなかつたのかと思つた。

動画内でその人はタイであつたことを話してくれた。フードコードで現地の女性に話しかけられたそう。その時に少し世間話をしていたときに「何をしにタイに来たの?」と聞かれたときに手術をしに来たとは言えなかつたそう。ただ去り際に胸を指して「切つたの?」と聞かれて胸オペのことだと理解し、勇氣を出して「そう!」と

答えると相手の人は自分の下半身を指しながら「自分も！」と言っていたと語っていた。タイでは性別に対してあまり抵抗や偏見がないことから話せたというのもあったかもしれないが、それでも国境を越えて、込み入った話ができるのは自分だったら無理だと思うし、そもそも誰にも話せないと思った。

だからこそ、自分は勇気を出して話してくれた内容を否定したり、馬鹿にしたりするのは許されないことだと思う。むしろ、顔が見えない分もつと悪質だと思う。実際に顔を合わせて同じことを言えるのか、相手の表情が悲しそうだったり苦しそうだったりしたときにその言葉を言い続けられるのかと思う。こんなことを言っているも綺麗ごとだと言って馬鹿にしたりスルーしていく人が沢山いるかもしれない。それでも言葉で人を殺せてしまうことを頭の片隅にでも置いておくことが大切だと思う。この作文でたった一人でも勇気を持って自分の考えを伝えられるようになったり、誹謗中傷をやめたりしてくれることを願っている。

障がい者への差別について

私が今回話すのは障がい者への差別についてです。なぜ私が障がい者のことをえらんだかというと、私には3才下の弟がいます。その弟には発達障害があります。普段はふつうの子とかわりはないのですが、勉強面や言葉使い、気に入らないと小さい子どものようにかんしゃくを起こしてしまったりします。そのせいか小学校に入学したばかりのころは同級生からバカやアホなどの暴言を言われていて「学校に行きたくない。いじめられるから。」と何度も言っていました。弟が発達障害だと診断されたのもちようどこのころでした。検査によると弟は同い年の子より2才3カ月おくらしている事がわかりました。私も実は弟が発達障害だと知る前は弟に「なんでこんな簡単な問題がとけないの!？」と言ってしまった事がありました。私たちにとっては簡単でもそれが弟にとつてはすごく難しい問題だったんです。私は弟にもうしわけない気持ちでいっぱいです。弟はよく母に言いました。「僕はなんでお姉ちゃんみたいに勉強が出来ないの?僕も勉強できるようにになりたい。」そう言っていました。今は支援学級に通いながら勉強をして少しずつ勉強もできるようになってきています。私は一番近くに障害をもった人がいるので障害者が周りからどう見られているか、学校でどんな

風にすごしているか知っています。だからと言って障害者の方々へ何か出来るわけではないですが、少しでも障害者だから出来ない、障害があるからみんなと同じにはなれない、そんな風に思う方が少しでもへつてくれることをねがっています。もちろん人には色々な考え方もあった人がたくさんいるので差別を完全になくすることはできないと思っています。でも障害者の人は障害があるから〇〇できないと最初から完全に否定してしまうのではなく、他の人と同じように温かい目でその人のしようにしてやる事を、その人が必要とするなら、全力でサポートしてあげるといふ考えを心の片隅に覚えておいてほしいです。

阻む壁

高等学校一年

中^{なか}澤^{ざわ}悠^{ゆう}希^き

障がいがあるから出来ないと思わないで欲しい。障がいがあるからこそ「私」という個性があり、その分他の人より努力が出来ると言いたい。

私は聴覚障がい者なので、コミュニケーションが出来ない、話を通じないと世の中から思われていることが多いように感じる。私は口の形を読み取りながら、補聴器を通して声を聞いてコミュニケーションを取っている。この二つの条件が合えば相手は何を言っているかは、ほぼ理解出来る。しかし、初対面の人の言っていることは一回で理解出来ない事が多い。初めて見る口の形なので、分からないのである。そのたび、「もう一回お願いします。」と伝えるようにしている。その時、補聴器をイヤホンだと勘違いして聞いてくる人や、「もういいよ。」と相手しなかったり、スルーしたり、障がい者への対応をめんどくさがる人など、さまざまな対応をする人がいる。それはよくあることなので、気に留めることはないが、卓球の時によくしんどい思いをする。

中一ぐらいから本格的に卓球の練習を始めた。小学生の時は祖父だけと遊びで卓球をしていたので、コミュニケーションにはあまり困ってなかった。しかし、卓球がもっと上手くなりたい、本格的に練習をしたいと思い、地域の小学校の体育館で行われて

いた卓球の練習に通り始めた。卓球連盟が開催しているのだから、そこで練習をした、強くなれるはずだと思つて行つていた。健聴者に練習相手をしてもらおうとすると、目が合わず話していることが分からなかったり、コミュニケーションを全くとらずに練習が終わつたりする。その都度、自分は「聞こえないから避けられているのかな。」と感じたり、「この人は聞こえないから話ができない。」と思われているのではないかと考えてしまつたりした。それから、何も話さずに黙々と練習だけをするようにした。そのような感じが続いており、練習試合でももちろん勝てるはずもなく、自分の力が伸びていないことが結果として表れてくるようになった。何としても勝ちたい、健聴者に。と思つた自分にはつとした。

よく考えてみると、「聴覚障がい者だから」という理由だけでしかたなく練習に付き合つてあげていると思われているのではないか。それなら、出来るだけ上手くなるように動画を沢山見て勉強したり、相手の言っていることを少しでも聞きとれるように積極的に話しかけたり、健聴者と何も変わらずに関わつてもらえるために努力をした。体育館で一回だけで良いからと相手をしてやろうと思える相手になれるように、全力で練習に打ち込んだ。そうすると話しかけてもらえるようになった。「一緒にやらない？」この一言だけで、卓球がとても楽しく感じるようになった。

やはり実際のところ、健聴者は実力差があるから相手にしないなんて考えていないことは分かっているが、話しかけたら関わってくれるが、関わり方を良く知らない人

は聴覚障がい者とはコミュニケーションが出来ないと思い込んだり、一緒に練習する方法が分からなかったりなどの理由で避けられているという人が多い気がした。まだ世の中に聴覚障がい者に対する理解が浸透していないのなら、自分なりにアピール手段を考えて、「おつ。この人とやりたい。」と思わせる人間になりたい。



聴覚障がい者と健常者

高等学校三年

大前知輝
おお まえ とも き

世の中の皆さんは、聴覚障がいと聞きどのような様子を思い浮かべますか。テレビドラマの影響で、多くの人は声だけでの会話が困難な人を思い浮かべたのではないのでしょうか。ですが、私は人工内耳という機器を装用しており、静かな場所であれば聴者と声のみで会話することも可能です。よく私は聞こえているのではと勘違いされます。

このように、聴覚障がいといっても聞こえるのと聞こえないのと1と0しかないというわけではありません。人には個性というものがあるように、聴覚の程度にも差があります。私のように静かな空間であれば難なく会話が可能な人、口の動きを見て大きい声で話をしてもらったら会話ができる人、基本的に声での会話が難しく筆談や手話を使う人など、聞こえの差は実にさまざまです。

では、聴覚障がいの人はどんなことに困っていると思いますか？多くは聞こえにくくコミュニケーションが難しいことに困っているでしょう。ですが、私の場合は逆でした。先ほども述べたように、私は静かな環境であれば健聴者と何ら変わりなく会話が可能です。知人にも「そういえばお前聞こえにくいんだったね。」と言われたこともあり

ました。しかし、周りがうるさかったり相手がボソボソとしゃべる人であつたりすると聞き取りが困難になります。そういう場合、普段は問題なく話せているということが自他共に足かせになつてしまいます。

私は一般の小学校、中学校に通つていました。もちろん周りは健聴者ばかりです。私は健聴者の中に混じつて、聞こえづらくいけど聞こえる人だと認識されているというハンデを持ちつつも私自身も健聴者と同じように過ごしていました。しかし、どうしても聞こえにくい場面はあり、私は適当に相槌をうつことでごまかしていたのですが、ある日友達と談笑していた際に、周りに人が多くて上手く聞こえなかったため、いつも通りたわいない話だろうと思ひ適当に相槌をうつていたら、いつの間にか自分が学校で傘を盗んだ犯人だということになつていたことがありました。その後すぐ友達に聞こえづらかつたことは言わずに、「話を聞いていなかった、ごめん。」と弁明し事なきを得ましたが、ヒヤツとした出来事でした。

といったように、中途半端に聞こえるからこそ周りに配慮を求めにくく自分ひとりでどうにかしようとし、よくない結果になることがよくありました。今は自分の聞こえ方を細かく説明して理解してもらえようように努力していますが、それでもやはり普段は健聴者と変わらない生活をしているのでいざ聞こえにくいというときに素直に配慮を求めにくい空気があるのは事実です。

はじめにも言いましたが、障がいと一言で言つても1と0だけではなく、個性のよ

うに人によってそれぞれ違います。ですから、障がい概念的な物として捉えるのではなく、その人の特徴を知るといった感覚で受け入れ、自然に互いが互いを思いやり合える社会を作っていけると障がい者だけでなく、すべての人が過ごしやすくなるのではないのでしょうか。



父の震える手

成人 和田夏未

私が小学校に入学する少し前、父が身体障碍者^{がい}になった。原因は脳梗塞だった。病気の直後は左半身が麻痺していたが、懸命なりハビリのおかげで不便はあるものの自分の足で歩き、日常生活を送れるようになった。

父は病気になる以前から機敏な人ではなかったと母から聞いていたし、物心ついたころからそんな光景が当たり前だったため、当時の私にとって父の障碍^{がい}は彼の癖の1つのように見えていた。そしてまた彼自身も自分の障碍^{がい}を茶化することがあったため、私は父が苦勞しているかどうか気にしたことがなかった。

しかし大学でデザイン科に入学したことをきっかけに、私はユニバーサルデザインに関心を持ち始めた。そこから父の障碍^{がい}を当たり前だと思っていた時期とは対照的に、日常生活における父の苦勞に気付くようになった。

ある日駅のタッチパネル券売機で切符を買おうとした父が、指の麻痺のせいで思うように操作できていないことに気付いた。さらに券売機にお金を入れようとした際に財布を持つ手が震え、小銭を地面にばらまいてしまった。この状況に直面した時、私は父の苦勞を強く感じたと同時にショックを受けた。彼は自分の苦勞を私に見せてこ

なかったが、私が想像する以上の生活のしづらさを日々負っているのだと初めて知ることとなった。

以後父の苦勞とユニバーサルデザインの学びを通して、私は今デザインを生業としている。デザインという美しく、一目見ただけで欲しくなるようなもののづくりと認識されることが多い。しかし私はそれに加えて父をはじめとするハンディキャップを持つ人々が直面する障壁しょうへきを少しでも取り除く、誰もが思いのまま社会生活を送れるためのデザインを提供したい。私一人では小さな取り組みかもしれないが、この信念がいつかすべての人を尊重する社会の形成に繋がると強く信じている。

身近な格差と向き合うこと

成人 大島 友子
おおしま ともこ

私が「格差」を身近に感じたのは祖母からの、「皮膚科をさがしてくれへんか？」という一言がきっかけだった。

皮膚科を調べるくらい一瞬なのだからすぐに聞いてくれたら良かったのに、と思いつつスマホがない人はどうしたらよいのだろうと考えたことから、デジタル格差が身近にあることを認識した。

祖母は九十二歳になるが、スマホを持たないため、病院への行き方など、自力で情報を得るのが難しいことがある。タウンページで調べようにも、タウンページを入手する方法もスマホで検索しないと分からないため、「お手上げやわ」とよく言っている。改めて祖母の目線で日常生活を振り返ってみると、駅ではQRコードを読み込みスマホ上に時刻表を表示するシステムになっっているため、スマホがないと電車の時間がわからない。病院ではスマホで順番取りをする仕組みのため、それができないと待合室で長時間待たないといけない等々、日ごろ自分が便利だと思っていたことが、スマホが使えない人の生活を不便にしていることがあった。

デジタル格差とはインターネットなどデジタル技術を使える人と、そうではない人

の間に生じる差のことで、デジタル情報にアクセスできないことが、経済的、教育的格差や、人を孤立させる一因になっていることが問題となっている。自分自身はスマートフォンで検索すればどんな情報でも入手できるのが当たり前で、便利さを感じることはあっても、問題があると思うことはなかった。

社会の多数派にとって便利で快適なことが、多数派ではない人を締め出していいか？祖母の一件は格差を実感し、考えるきっかけとなった。

では、格差を解消するためにはどうしたらよいか？デジタル格差の解消策として最初に思いついたのは、スマホが使えない人に、使えるようになってもらうことだった。しかし、祖母の姿を見て、それが本人にとって快適なのか？を考えると、そうではないと思った。スマホを普及させることが解決策になる場合ももちろんあるだろう。しかし、それは少数派の人を認めないということであり、多数派目線の解決策である。すべての人が快適に生活できるよう、社会の仕組みを整備し、周囲の人のサポートを得られるようにすることが本当の解決策であると私は考える。

格差は多数派の側にいるとその存在に気付かない、問題があることを認識できない。だからこそ、一人一人が当事者として考えることを忘れてはならない。多様な人が存在する社会では、性別、国籍、障がいなど、様々な理由から格差が生じているが、それらを解決していくためには、当事者として格差について考えていかなければならないと、今回の一件は教えてくれた。

今後自分は、マイノリティの側を含めて全員が快適に過ごせるかという視点を忘れずに、立ち止まって考える癖を身に付け、よりよい社会の創造に貢献できるよう、身近な格差と向き合っていきたい。



アボジ(父)オモニ(母)の思いを胸に歩み続ける

成人(中学校夜間学級三年)

曹^{チヨ}

順^{スン}連^{ヨン}

私は大阪府和泉市で在日朝鮮人二世として戦争中に生まれました。五歳の時に戦争が終わり、それからしばらくして和泉にできた朝鮮学校に入学しました。朝鮮学校の勉強は少ない人数のクラスでしたが、とても楽しかった記憶が残っています。特に、十二人のクラスみんなで奈良に遠足に行ったことは今でも思い出として胸に焼き付いています。そのころの在日朝鮮人は民族教育に燃えていたといわれています。しかし何年か経つと朝鮮学校は閉鎖されてしまいました。日本の学校に、のぞきには行きましたが、通学することはなく、そのまま学校に行くことはありませんでした。

家の近所は朝鮮人が何軒も固まって住んでいるところで、みんな助け合って暮らしていました。取り入れが終わったあとの芋畑の端の方を掘って出荷できない芋を取ってきて蒸して食べたり、田んぼのタニシを取って食べたり色んなことをして生活を支えていました。

小さい時の記憶は、やさしいオモニの記憶です。オモニは、働き者で、たくさんの野菜を安く買ってきてキムチをつけてくれたり、パンチャン(おかず)を作ってくれたりしたことを思い出します。

アボジは橋を架けたり、道をつけたりする仕事でした。何人もの作業員の親方をしていたんですが、気がやさしすぎて仕事の上で大変な時もあったようです。子どもにもやさしくて北助松の海まで連れて行ってくれて貝や海草などを取って、食べ方を教えてくれたりしました。

そのアボジは私が十一歳の時、亡くなりました。それからのオモニは大変でした。その前の年に私のふたごの妹たちが生まれたばかりだったのです。兄弟は九人で一番上の姉はもう大きくて家のことをやってくれました。オモニは外に働きに行きました。働くといってもそのころの在日朝鮮人が仕事を探して、すぐにできたのは、土方仕事でした。私は小さかったですが、小さいなりに家の仕事を手伝いました。アボジがいなくてもオモニと九人兄弟の家族は助け合って暮らしました。学校に行かなくなったら私は近所の工場で模造真珠の糸通しの作業をしました。その当時の和泉は模造真珠を作る産業が盛んで、それを糸に通す仕事は子どもにもできる仕事でした。

やがて十代の後半になったころにもっと仕事をしなければならなくなりました。阪和線に乗って天王寺で乗り換えて桃谷まで行き、ヘップサンドルの工場に通うようになりました。最初はサンドルに底をつけた後の糸を切るだけの仕事でした。だんだんサンドルの底をつける作業をするようになりました。まだ、機械もなく、金づちで底をたたいてつける手仕事でした。その頃はたくさん仕事があつて仕事ができればできただけお金がもらえました。家にたくさんお金を入れることができたときは、嬉し

かったです。ベンゾールという接着剤のにおいが体に悪いことは知っていましたが、働くことに必死だったので気にもかけませんでした。その仕事は二十三歳で結婚する時まで続けました。

結婚してから働いて働いて、働きづめでした。仕事の上でも漢字を読んだりすることは何とか出来ました。朝鮮学校でも教えてもらったし、本を読むのが好きだったので、自分でも調べました。でも、難しい漢字はどうしても書けるようになりません。勉強が途中までだということがずっと気になっていました。二年前に殿馬場中学校に入学しました。なかなか年を取ってからの勉強は大変です。でも、親思いの子どもたちにも支えられて、学校を続けています。

今、嬉しいことはローマ字が読めるようになってきたことです。看板を見て TOYOTA とか HONDA と書いてあっても自分には関係のない文字だと思っていました。しかし、学校でローマ字を習って「ああ あのトヨタのことか。」とか「あのホンダのことか。」と思うと、とても嬉しく思います。

今の調子で色んなことを勉強し、学校を楽しみながら長生きしたいと思います。



選考にあたって

四十四回めとなる「わたしからの人権メッセージ」。今回、二千六百八十八点ものご応募をいただき、ありがとうございます。審査員を代表して、ご応募いただいたみなさまに、心よりお礼申しあげます。さまざまな年齢層の方からの応募作品は、どれも力作ばかりで、一つ一つ読み進めていく中で、強く心を打たれるとともに、感動し、共感を覚えました。

選考では、一次審査で五十点に絞り込み、さらに、審査会で二十点の特選作品を選出しました。審査基準は、人権テーマについての「正しい理解」、また、社会や世界の人権課題について「自分自身の問題としてとらえているか」、人権が尊重される世の中にしていくために「どのように行動しようとしているのか」などに焦点をあて、選考いたしました。

この「わたしからの人権メッセージ」の特長は、小学校二年生から九十代の方まで、それぞれの年齢において、さまざまなテーマについての「人権メッセージ」が、自分の言葉で書かれている点です。特に、今年度の応募作品には、平和をテーマにしたものが多く見られました。学校で平和学習を行い、その中で感じた思いや願いを、「自分なら」という視点で考えていました。実際に戦争を経験した方からの講話を聴き、今の日本が平和なのは決して当たり前ではないこと、そして、このことを、次の世代に伝えていくことの大切さが書かれていました。また、インターネットでの誹謗中傷について書かれた作文も多く見受けられました。インターネットの特性についてしっかりと理解し、匿名である

がゆえ、発言には責任をもち、より慎重にならないといけないことなどが書かれていました。

大切なことは、これらの地球規模で起こっている、人権に関わるさまざまな問題を、「自分のこと」として受け止めるとともに、その解決に向け、どんな小さなことであっても、勇気をもって「自分にできる一歩」から歩みはじめることだと思えます。自分の体験から発せられる、自分の言葉で書かれた素晴らしい作品がこの特選作品集にはちりばめられています。この冊子をご覧になられた方々も、ぜひ作品を通して人権について自分が感じたこと、考えたことを大切にしてください。また、「書くことを通して表現」していただくことで、この「人権メッセージ」の取組の輪が広がることを期待しています。

誰もがみな同じようにもっている「人間らしく生きる権利」。しかし、まだまだ差別や偏見により、人権が守られていない現実があります。「人権」は、私たちの生活の中で、とても身近で大切なものです。これからも人権についての学びを深め、ともに社会でつながり合い、人権尊重の社会をいっしょに築いていければと願っています。

審査員長 中 谷 喜 大

(堺市人権教育推進協議会副会長)

第44回わたしからの人権メッセージ(2023年度) 応募作品テーマ内訳表 【応募数】

テーマ	学 年		小 学 校			高等学校 /大学	一般	分野別 合計
	低学年	高学年	1年	2年	3年			
同 和	0	5	12			4	0	21
女 性	0	3	43			8	4	58
障がい者	6	17	166			33	6	228
外国人	5	3	84			15	6	113
子ども	1	17	116			19	4	157
高齢者	2	3	29			2	8	44
LGBTQ	0	8	139			40	1	188
平 和	131	761	169			35	9	1105
環 境	2	11	61			58	2	134
感染症	0	2	25			22	1	50
犯罪被害者やその家族	0	16	16			3	0	35
インターネット	0	8	151			38	1	198
その他の人権	2	21	253			56	25	357
年代別応募数	149	875	1264			333	67	2688

【今年度応募作品の傾向について】

- 平和と人権がテーマの作文については、今年度は堺大空襲の語り部ボランティアである、ピースメッセンジャーの講話を聞いた感想が多く寄せられた。実際に戦争を経験した方の言葉には重みがあり、貴重な時間を共有することができたという感想があった。また、今後絶対に戦争は起こってほしくないという願いも書かれていた。
- インターネットと人権がテーマの作文については、芸能人に対する誹謗中傷と自死についての感想があった。インターネットは自分たちにとっても身近な存在で、使い方を間違えると、人を死に迫いやることもある、危険なものだというものだった。
- LGBTQ・ジェンダー平等と人権がテーマの作文については、性別による決めつけに着眼したものや性別役割分担に関する大人の発言に疑問視するもの、心と体の性別が違う人に対しての偏見や差別をなくし、ともに生きることの大切さを訴える作品が多く見られた。
- 作文の主張として、1人ひとは違う人間であり、全く同じ人間は存在しない。そのため、考え方などが違ってあたり前ということ。違いを批判したり、攻撃したりすることなく、お互いを認め合える社会の実現をめざしたいということが多く書かれていた。

御応募いただいた学校その他団体名

※5年以上連続で応募があった学校や団体には、☆印をつけています。

【小学校】

☆浅香山小学校	登美丘西小学校	☆福泉小学校
☆市小学校	☆錦小学校	福泉上小学校
☆英彰小学校	庭代台小学校	槇塚台小学校
☆榎小学校	野田小学校	御池台小学校
家原寺小学校	☆浜寺小学校	美原北小学校
鳳南小学校	☆浜寺東小学校	三原台小学校
☆金岡小学校	原山ひかり小学校	八下西小学校
神石小学校	☆東陶器小学校	安井小学校
☆北八下小学校	東浅香山小学校	熊野小学校
黒山小学校	東深井小学校	
五箇荘東小学校	東三国丘小学校	
☆城山台小学校	東百舌鳥小学校	
☆泉北高倉小学校	日置荘西小学校	

【中学校】

泉ヶ丘東中学校	八田荘中学校	美原西中学校
上野芝中学校	浜寺中学校	八下中学校
☆大泉中学校	原山台中学校	☆陵西中学校
鳳中学校	晴美台中学校	
☆金岡北中学校	平井中学校	
☆金岡南中学校	深井中央中学校	
☆津久野中学校	福泉南中学校	
☆殿馬場中学校夜間学級	☆美木多中学校	
庭代台中学校	☆美原中学校	

【高校・団体】

☆大阪商業大学堺高等学校	☆だいせん聴覚高等支援学校	堺識字・多文化共生学級「つどい」
☆堺高等学校	☆(株)クボタ堺製造所	☆堺自由の泉大学
堺リベラル高等学校	(株)クボタグローバル技術研究所	

たくさんの御応募ありがとうございました。

第44回「わたしからの人権メッセージ」審査員

稲 田 美 穂	堺市人権教育推進協議会 常任幹事
大 井 敦 史	堺公共職業安定所 管理部長
大 町 む ら 子	堺市人権教育推進協議会 副会長
川 畑 晴 久	堺労働基準監督署 副署長
高 橋 淳 子	堺市総務局人事部人事課 参事
中 谷 喜 大	堺市人権教育推進協議会 副会長
平 井 純 子	堺市人権教育研究会 事務局
増 田 亜 紀 子	堺市教育委員会事務局学校教育部生徒指導課 指導主事

< 敬称略・五十音順 >

第 44 回わたしからの人権メッセージ 特選作品集

2023 年12月発行

編集・発行 堺市人権教育推進協議会
〒590-0078 堺市堺区南瓦町3番1号
堺市人権推進課内
電話 072-221-9280
FAX 072-228-8070

私たちのまち堺から
人権文化の花を咲かせよう

この特選作品集は、「第44回わたしからの人権メッセージ」に応募された
2688点の作品のうち、特選作品20点を掲載したものです。

